

オギノ式避妊法の荻野久作

戦前までの日本は「嫁して3年子なくば去る」という社会背景で、不妊のため離縁されたり労働力としての多産を要求されて体を壊す女性もいた。そのような不妊や多産に苦しむ女性の排卵時期を解明した荻野久作（1882～1975）が、計画的な出産を研究した結果、副産物として生まれたのがオギノ式避妊法と言えらるう¹⁾。

1909（明治42）年に東京帝国大学を卒業。しばらく同大学病院で勤務したのち、1912（明治45）年に新潟市の竹山病院産婦人科医長に就任し、それ以後、ほとんどの生活を新潟で送っている。その当時は排卵と月経の関係はまったく未知の分野だった。排卵という人間の誕生につながる基本的問題を解決したかった。子供ができるためには卵子と精子が一緒にならなければならない。しかし女性の排卵は月に1回である。排卵の時期が分かれば、子供を欲しがっている夫婦にとっても、欲しくない夫婦にとってもその価値は大きかった。

ある日のこと、以前に子宮筋腫の手術を行ったおハナが夫を伴って荻野を訪ねて来た。おハナ夫婦は子供を希望しているのに、子宝に恵まれないと訴えた。しかし話を聞いているうちに、おハナは妙なことを言い出した。「いつも月経が始まる2週間前に腹痛があるので、腹痛のある日は、お腹にさわると思い求めを拒んできた。」ということであった。この言葉に荻野ははっと気がついた。その腹痛とは排卵時に感じる排卵痛であろう。そうであれば排卵時に性行為を拒めば子供ができないのは当然のことだった。おハナ夫婦に「お腹が痛い時に仲良くすれば子供ができる」と教えると、翌月、おハナは見事に妊娠した²⁾。

月経から次の排卵日を求めるそれまでの学説は間違いで、本当は逆ではないだろうか。多くの学者が「月経から何日目には排卵がくるか」というドイツ学説で争っている時に、おハナの言葉をヒントに、「排卵日を次の月経から逆にさかのぼる」という逆転の発想であった。いわゆる荻野学説は、女性の排卵の時期は予定月経前第12日より第16日までの5日間であり、また受胎期は予定月経前の第12日から第19日までの8日間であることを示したものであった³⁾。この精子の生存期間を考慮した“オギノ式受胎調節法”を逆手に取って、この間の禁欲を勧めたのが“オギノ式避妊法”である。

1924（大正13）年、荻野は東京帝国大学に主論文「人



写真1 寄居通りはオギノ通りに名称が変更された



写真2 オギノ公園の荻野久作像

類黄体の研究」を提出し同大学から医学博士号を取得した。そして同年、この基礎研究を更に発展させた論文が「排卵の時期、黄体と子宮内膜の周期的変化との関係、子宮内膜の周期的変化および受胎日について」という長い題名で「日本産婦人科学会誌」第19巻第6号に発表した。

荻野は新潟市寄居町に住み、大学からの教授就任依頼を断り、生涯を民間病院の勤務医として送った。1975（昭和50）年、荻野の功績を称え「寄居通り」は市民の発意で「オギノ通り」と名付けられた（写真1）。また2002（平成14）年には、荻野の自宅跡にオギノ公園が完成した。せせらぎの流れるオギノ公園には、椅子に座りタバコを楽しむ荻野久作博士の銅像が建てられている（写真2）。世界的な学者でありながら名誉を欲せず、新潟市民のために尽くした荻野久作、その名前は永遠に新潟の地に残ることになった。

参考資料

- 1) 鈴木昶, 日本医科列伝. 372-376, 大修館書店 (2013)
- 2) <https://www.cool-susan.com/>
- 3) 横山美和, 日本の専門家による荻野学説の受容について, 生物学史研究, 97 (2018)

（日本診療放射線技師会 諸澄邦彦）